



疳の強い子・落ちつきのない子

— 身体の異常か、精神の異常か —

広瀬 興

田舎では、未だ所謂、疳の強い子には孫太郎虫を煎じて吞ませたり、呑竜さまに虫封じに行ったり、或いは額に紅を塗ったり、項部を紙そりで乱刺して射血したりする習慣があります。

こういう子のお母さんは子供の何処かに「虫」がいると信じているのです。その「虫」が体内で暴れて子供に疳を起させたり、落つきをなくさせたりすると思ひ、又、中には、指の先きから白い絹糸のような虫が、煙のようにフワ／＼と舞い上ってくるのを見たと言するお母さんさへあります。事実、蛔虫などが寄生すると神経質となったり、そわ／＼落ちつきがなくなったり、食べ物の好き嫌いが強くなったりしますから、蛔虫——「虫」というように、ごっちゃに考えて了うのでしよう。山梨県のある田舎の保育園の母の会で蛔虫の話をしたところ、そのあとで一人のお母さんが真面目の顔をして「先生！ お腹の中の虫をすっかりおとしてしまつたら、虫の知らせというものがなくなつて困りはしないかね」と質問されたことがあります。

私どもはよく、うちの子は疳が強いとか、落ちつきがなくて困る

とかの相談を受けますが、その子をよく観察すると、その様子がいろ／＼で、又、年齢によつてもその現われ方が千差万別であります。例えば、

(一) 「イラ／＼して怒りぼく、泣き虫で、直きにフンヅリ返つて了うような子」「一つところにちつとしていられない、食べものもこつちを一寸食べたかと思つと直ぐあつちを食べちらかす」或いは「一つことに熱中できず、気が移り易く、あつちへ行つたりこつちへ来りする」「一つおもちにすぐあきて別のものになつる」

(二) 「身体の一部を絶えず無意識に動かしたり、咳払いしたりから咳したり、常にクフン／＼鼻を鳴らしたり、頭をかく、耳をいじる、鼻の孔に指を入れたり出したりする、或は貧乏ゆすりをするなど少しも落つきがないという子がいます。

(三) 「一時的に不随意に眠ばたきを繰り返したり、指先きを擦れんさせたりする」これは自分で止めようと思つてもその運動を止めることが出来ない。こんな子も、又、はたで見てみると如何にも落ちつきがないようにみえます。

(四) 赤坊で、絶え間なく、頭を左右に動かしたり、お腹のすかないときでも舌をペロ／＼出したりしている子、休みなく眼玉をせわしくクル／＼まわしている子があります。

(五) 平素、顔色が悪く筋肉の緊張も弱く、口唇の色もさえない発熱し易く吐き易い、そして極れん性で何んとなく不安の様子をしている子があります。

(六) 自分の意に反すると直ぐに怒る、例えばお腹がすいてお乳を与えようと準備しているとそれが待ちきれず怒って了って今度は口へ持っていても飲まない、真紅になって啼泣し、遂いには蒼白になりびきつけて了うようなものもある。友達がおもちゃをとったといて怒り、先きに駆けていったといて怒り、処かまわらずソリ返って、憤怒し、体を強直し、チアノーゼ（口唇紫らん色）となり失心して了うものもある。

(七) 夜中夢をみて物におびえ、起き上って泣き叫び一時、夢中であばれる、しばらくすると自然に落ちつき熟睡し、翌日は昨夜のことは少しも記憶にないというのがあります。

このように、疳が強いとか、落ちつきがないとかいう場合にも、よく、観察するといろいろの種類があつて、身体的の異常からくる場合と精神的の異常からくる場合とありますが又両方からくる場合もあります。乳児や二・三才の幼児は年長児に比して両方が重なり合つてくる場合の方が多いものです。又、両者の区別がはっきりしないものもあります。こんな場合の子供の取り扱いは非常に難しく只教養の方面の保育だけでは満足を得られないこと、なります。いづれにしても、脳神経系領域の問題で、医学的にも心理学的にも未

開拓の部分なのでその治療が困難なのであります。

元来、子供はちつとしていないものです。それは未だ脳神経の働きが不完全で、外からの刺激にも、身体の内からの刺激にも極めて影響され易く、少しのことで心理作用や反射作用が動ようし、従つて動作も変化し易いためです。それ故、普通は脳髓に特別に病変がない限り大人になるに従つて、だん／＼普通になるのがあたりまえなのであります。

しかし、親に梅毒があつたり、大酒呑みであつたり、脳膜炎の如き病気にかゝつたり、或いは近頃、問題にされているように、妊娠第二カ月末から三カ月初め頃の発生学上、臓器形成期とよばれる期間に、もし母親が風疹のようなウィルス性疾患にかゝると生れてくる子が精神薄弱となつたり、先天性畸形（例えば、三ツ口、多指短指の如き）になり易くそして知能にも欠陥が起ると云われています。このような子は落ちつきがなく注意力が散漫となり、或いは疳が強く、大人となつても、なか／＼治りません。このような子は落ちつきがないというばかりでなくその他にもいろいろの大きな難しい問題があるのですから特別の注意が肝心です。そして早く特別の治療と保育をすれば、よし、知能は遅れていてもそれなりに社会生活が出来るように成長しますし、従つて大人になつても家庭や社会に迷惑をかける度合が少くなるわけです。

又、(三)(四)に述べたようなものは、一種の「ノイローゼ」(神経症)といわれるもので、これは梅毒や脳膜炎や小児麻痺の後に起るような脳髓に器質的障害があるのではなく、官能性のものです。神経衰弱、ヒステリーなどというもの、部類で、これにもいろいろ

の種類があります。

前述の(三)の如く、絶えず眼をパチ／＼させたり、指先きを小さきさまに動かしたり、ある同一の筋領域にくる逡れん性不随意運動で、これを「チック症」といっています。これは睡眠時には休止しています。この病気は案外多いもので、その部位や程度はいろいろですがこれも一見落ちつきがないようにみえます。多くは家庭に不調和や環境に異常のあることを発見します。暗示や催眠術をかけたり電気をかけたりします。例えば肩を動かす場合にはそこに電気をかけてだん／＼部位を移動させ指先きから追い出して／＼というような方法などをとります。

又、(五)のようなものは鉛の慢性中毒によって起る逡れん性素質で、これは現代の医学では治療困難です。ペンキ職の子、印刷所の鉛活字拾いの子、あんま膏(基剤に酸化鉛含有)の製造内職の子など鉛を取扱う母親の乳幼児に起ります。これは十数年前、京都で合鉛白粉(ばっちり、壺おしろい)を使って濃厚化粧している母親の乳児に所謂脳膜炎の多いことよって発見された有名な病気であります。今は合鉛白粉は禁止されて市販はないが鉛取扱ひ者の家庭に稀に発見されます。この鉛中毒による脳膜炎は一種の血液毒によるのですからビタミンCの補給、肝臓食、肝臓製剤などを与えるのですが一度重くなると全治は困難で、幾分、軽快しても抵抗力が弱いため他の病気で死亡する場合があります。

また、(六)のようなものを「憤怒癲癇症」といい、(七)を、「夜驚症」といいます。これらも一種のノイローゼなので、後述のように、かゝり易い素質の上に栄養の不適當、住居衣服の不良、環

境の異常などいろいろの原因によって起り、多くは年令が進み、抵抗力が強くなるに従って現われなくなるのですが、それでも、最も大切な発育の時期に起るので、将来、精神生活に少なからず影響を残すものと思われれます。

また、離乳が遅れると神経質となりますがこれは生後五カ月頃となると、母乳のみですと量的には十分としても、質的に栄養成分、(鉄、磷、カルシウム、各種のビタミンなど)が不足するようになります。即ち水ばい食物を食べているのと同じです。元来これらの成分は胎内生活のときに母の血液中より摂って肝臓其他の臓器に貯えておいたのですがこの頃になると用いはたして母乳中のものだけでは不足となり、一種の栄養失調を起し、貧血、筋肉がブヨ／＼となり神経質となってイラ／＼するようになり、体重の増加も少くなります。呑竜さまの御厄介になるのもこの頃です、それ故、母乳以外にこれらの成分を含んでいる食物例えば人参、青野菜、白菜、卵黄、レーバーの如きを消化し易く調理して、少量よりだん／＼増加しながら十分与えることが必要なのです。そして母乳を止めても発育に必要なだけの食餌を食べられるようになったとき断乳するのですがその時期を大体一年から一年二、三カ月を目標とするのが理想的であり、もし遅れると前述のような神経質の子供となり、よし全く断乳してもつゞいて幼児期にも神経質となり異常な性質を残すことが慮々あります。離乳の時期と方法が不適當であるために、身体的精神的両方面に大きな影響を与えていることを、一般が十分に認識しておらないことは重大な保健問題と思ひます。

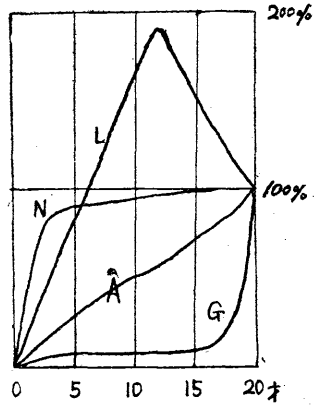
また、腸寄生虫殊に蛔虫症のときも神経質となります。戦後余り

に蛔虫が蔓延したために生後間もない乳児から蛔虫排出をみることに稀れではありません。ましてや離乳期の頃となればしばしばです。幼児期に至っては検便しても確実に証明出来ない場合もありまゝから隔月位に駆虫剤を与える方が賢明であるとさえ考えています。十二指腸虫も案外多いもので、ある地方では蛔虫寄生率と余り変りない位です。今迄、十二指腸虫が少いと思っていたのは蛔虫の如く普通塗末標本では検出困難で、飽和食塩水浮遊法によると以前よりもっと高率を示します。それ故、神経質や、落ちつきがなくなつたときは念のため駆虫剤を与えてみる必要があります。

又、直接、脳神経に欠陥がなくとも、身体が生れつき弱いとか、生れて間もなく重い病氣にかゝつたとか、乳離れが大へん遅れたとか、食べ物の好き嫌いが強いとか、蛔虫や十二指腸虫にかゝつているとか、兎に角、身体に異常があつたり、或いは住居の環境衛生が悪く、例えば冬、アパートの北側に住んで乳幼児に十分日光を当てないとか、万年床の習慣のところ、赤坊を「えじこ」に入ればなしにするとか、工場地帯で煤煙が多く空気が濁っていると、炭火石油こんろを使用しているとか、都会地のそり音になやまされているとかいろいろの悪い住居や衣服の影響によつてだん／＼神経質となり遂には落ちつきがなくなることがよくあります。

それでは、このようなことが何故その原因となるかという点、元来、私共人間の發育は大體、二十二、三才で完成されるものと云われていますが、その身体の中のいろいろの生理的器官は各々その發育の速度が違い、あるものは早くあるものは極めて遅くなどその速度に差があります。最も早いのは脳神経系統で、最も遅いのは生殖

各生理的器官の發育速度



- N.....脳神経系
- L.....淋巴腺系
- A.....筋・骨其他一般系
- G.....生殖系

器系統です。淋巴腺系統は十二才の頃却つて過じょうに發育しその後、だん／＼小さくなり二十才頃になって漸く普通の大きくなるのです。それ故、例えば、一度大きくなった胸腺が仲々小さくならず残ると所謂胸腺淋巴性体質といつて特異の体質となります。扁桃腺が小学校過ぎると自然と小さくなり摘出手術が不要となるのも、その理由によるのです。脳髓などは生後は約三五〇瓦ですが(大人の四分の一)五才で已に大人の脳重さと同じの一四〇〇瓦にもなります。ですから、このように急速に發育する乳幼児時期のいろいろの心身の環境がどんなに大きく強く脳髓の發育に影響するか想像に余りがあります。そして、私共の知能や性格もやはり脳髓の作用なのですから、急速に發育する未熟の乳幼児期に、身体的には勿論、精神的にも良い影響を与えなければそれが少年期、青年期続いて成人期に迄つきまといつてゆくことは当然であります。それ故落ちつきのない子の中には一見、身体は大へん丈夫そうに

見え、元気で身体をもてあましているようなのがありますが、よく観察すると、案外神経質で過敏質のものが多くあります。そのため蕁麻疹や湿疹が出来易く、又おねしょの癖があったり、夢をみやすかったり、はしゃぎやであったり、内べんけいであったりします。

こんな子供の家庭は心理学者がよくいうところの「不調和の家庭」であることが多いものです。即ち、「甘すぎる家庭」「きびし過ぎる家庭」「放りばなしの家庭」「不和な家庭」「ざわ／＼した家庭」などです。例えば両親の一方が大へん神経質であるとか、おばあさん子であるとか、未っ子であるとか、一人っ子であるとか、女ばかりの同胞中の男の子であるとかは最も問題となります。

また、その他、不良の住宅や好ましくない環境のため例えば住い
がさわがしい繁華街であるとか、その家の職業によって一日中や
ましく、少しも落ちついた気分になれず、熟睡もできない、或いは
蚤や蚊、蠅に攻められるというようなことは同じような理由で乳幼
児は常に強い刺戟を受けて、知らず知らずのうちに、落ちつきがな
くなり神経質とならざるを得ません。

以上、落ちつきのないようになる原因や誘因について述べてみま
したが、このような子をよく調べるとそのどれかにあてはまるでし
ょう。或いはその幾つかが重り合っている場合もあります。即ち、
前述の如く、元来、子供は落ちつきのないのが普通なのですが、生
れつきその傾向の強い、神経質の子供が、身体的障害、家庭の不調
和、或いは住居、衣服、食物など環境衛生上の異常などによってそ
れが刺戟され、強く現われてくると考えてよいのです。

それ故、疳が強いとか、落ちつきがないというばかりでなく、い

ら／＼の悪い性格を予防し、すなおなよい性質に導き育てるには、
妊娠中の母性の健康から始め、生れた後は早くより正しい合理的科
学的の育て方を実行することが第一です。殊に小児急性伝染病の予
防接種、離乳期栄養の時期と方法を誤らぬようにすること寄生虫の
駆除など実行のできることです。そして、このような性質の強くな
らない中に、その家庭の事情に応じて、乳児は乳児なりに、乳児は
乳児なりの「しつけ」や鍛錬が必要です。例えば、授乳時間を合理
的に守るとか、食事やお八つを正しく与えるとか、好き嫌いさせな
いとか、寝る時間起る時間を定めるとか、夏は午睡を励行するとか
冬でも寝衣を着換える習慣、授乳後は必ず便通させるくせ、おしめ
を常に清潔にしておくとか、食前の手洗いなど所謂乳幼児の基本的
良習慣をつけておくことが何より肝要なのです。

已に、神経質の子とか、落ちつきのない子供に対しては年令によ
って、よくその原因を身体的と精神的の両方面から確かめることが
必要ですが、その原因が極めて複雑な場合が多いものですから、こ
んがらかった結び目をときほぐすように、それを一つ一つ根気よく
ほぐしてゆかねばいけません。そうすれば器質的障害のない限り年
令のすゝむに従って、却って、落ちついた活潑なよい子になるもの
です。よし、遺伝的にそのような悪い性質が幾分あったとしても、
生後の環境や教育が良いならば必ずその悪い性質もある程度押さえ
つけられてそれ以上大きくならず、かくされて現れない場合すらあ
ります。これは身体的にも、精神的にもいうことができます。

(恩賜財団母子愛育会福祉部長・医博)